

◆コミュニティ子ども学科 2年 吉井理奈

今日は10月下旬から始まる、最後の実習である児童養護施設実習への意気込みをお話したいと思います。「児童養護施設」とは、家庭での生活が難しいさまざまな事情を抱えた子どもたちが暮らす施設です。乳幼児から18歳くらいまでの子どもたちが、職員の先生方と共に生活をしています。そこでは、ただ「お預かりする」だけではなく、食事・入浴・就寝といった基本的な生活習慣のサポートや学習援助、遊びを通じた情緒の安定、さまざまな行事への参加など、日常生活の全てで子どもたちの成長を支えます。まさに「第二の家」として、安心できる居場所を提供するという、重要な役割を担っています。

私は昨年も児童養護施設で実習をさせていただきました。朝の起床支援から始まり、朝食の準備や片付け、登校・登園の見送り、放課後の宿題見守り、夕食、遊びの時間、夜の就寝準備まで、子どもたちの1日を職員の先生方と一緒に過ごしました。食事作りや公園での遊び、地域の行事にも参加し、子どもたちと多くの時間を共有することができました。しかし、昨年の私は、「表面的な関わり」で終わってしまうことが多かったのではないかと思います。子ども同士の喧嘩が始まれば「どうしたの・なにがあったの?」との声がけは出来ました。一緒に遊ぶことも出来たと思います。しかし「この子は今、何を感じているのだろう」、「もっと深い信頼関係の構築は、できないのだろうか」と考えたとき、そこには躊躇してしまう自分がいました。自分が発した一言で、折角構築し始めた関係性が壊れてしまうことを恐れたのです。優しく接することは出来ます、しかしそれは、「一人ひとりの人格に心から寄り添うこと」とは本質的には違いうのだということを、その実習を通じて痛感したのです。

あれから1年が経ちました。私は「責任実習」として、再び同じ児童養護施設で最後の実習を迎えます。責任実習では、昨年よりも主体的な役割が求められます。子どもたちの様子を細かく観察して心情を読み取ったり、個々の子どもに合わせた関わり方を意識して記録を取ったりする機会が増えると思います。今年の私の目標は、とてもシンプルです。「昨年の自分を超越すること」です。ただ一緒に遊んだり、日常の援助をしたりするだけでなく、自ら勇気を持って一歩踏み込み、子どもたちの心の声に耳を傾け、本当に寄り添えるような関わり方をしたいと考えています。表面的な関わりをする保育者ではなく、心と心が通じ合うような関係を築ける保育者を目指したいです。時には子どもたちから厳しい言葉を返されるかもしれないし、うまくいかない日もあるかもしれませんが、でも、そういうときこそ逃げずに正面から向き合う勇気を持ちたいと考えています。

この実習は、来年から社会人として保育の現場に立つ私にとって、最後の学生としての大きな挑戦です。昨年、共に生活した子どもたちと再会できる喜び、不安、そして期待が入り混じっています。でも、昨年の反省を活かして、「今年の自分はもっと成長するんだ」という強い思いがあります。私はこれまで、保育の勉強だけでなく、ピアノの練習や学生広報スタッフとしても活動してきました。どれも簡単なことではありませんでした。続けていく中で「少しずつでも前に進むこと」の大切さを学んできました。その経験を、児童養護施設実習にも活かしたいと思っています。最後に、誰でも「過去の自分」や「現在の自分」を越えて行くのは勇気がいります。でも、その一歩を踏み出した先にしか見えない景色や大切な出会いがあると思います。そして、自分の殻に閉じこもっていても成長はありません。私はそれを信じて児童養護施設実習に全力で向き合い、自分らしい挑戦をしていきます。ご清聴ありがとうございました。

---

◆キャリアデザイン学科 2年 山村 享佑

みなさんは「ちゃんとしてるね」と言われたことはありますか?私はそう言われることがよくあります。それは周りに迷惑をかけないようにとか、期待に応えられるようにとか、できるだけ正しくいられるようにとか、そんなふうに、自分なりに心がけて頑張ってきたためだと思います。そのため周りからは、君は真面目だとか、しっかりしているとか、そう言ってもらえることもあります。けれども、そうした言葉をもらうたびに、少し複雑な気持ちになります。なぜなら、自分の中には、周りから見えている自分とは違う部分もあるからです。私だって、自分に自信があるわけで

はないし、迷わないわけでもないし、いつも強くいられるわけでもありません。むしろ、何かを選ぶたびに悩んだり、これでいいのだろうかとか立ち止まったりすることのほうが多いです。

最近は特に、将来について考える時間が増えました。私は今、大学編入という目標に向かって勉強しています。進みたい方向がある。頑張りたい理由がある。だからこそ、毎日少しずつでも前に進もうと思えます。でもその一方で、目標があるからこそ生まれる不安もあります。その目標に本当に届くのだろうか。努力した先に、自分が思い描く未来はあるのだろうか。もし届かなかったら、自分はどうなるのだろうか。そんなことを考えてしまう時もあります。確かに未来には、たくさんの可能性はあります。それは希望でもあります。同時に怖さでもあると思います。進める道がひとつなら迷わないかもしれませんが、けれども、道は無数にあるからこそ、どれが正しいのかわからなくなることがあります。未来は無限にあるからこそ、むしろ辛いとも考えられます。

私は昔から、他人には見せたくない自分の一面を隠そうとしてきた気がします。それは、弱い自分や情けない自分、かっこ悪い自分の一面です。そういうものを、できるだけ人には見せないようにしてきたのです。人から見て「変なところがないように、汚い欲望は見せないように、綺麗なものでいるべきだ」自分でも気づかないうちに、そんな殻のようなものを作っていたのだと思います。そして、その殻の中で振る舞うことが、いつしか自然体の自分だと思い込んでいたのです。でも最近、その殻が少しずつ窮屈に感じるようになってきました。

本当の自分は、果たしてこんなふうだったのだろうか。そう考えたとき、私は気づきました。本当の自分は、もっと未熟で曖昧で、不器用です。考えすぎてしまうし、人と比べてしまうし、自分の価値を必要以上に低く見てしまうこともあります。何かうまくいかないことがあると、そう思ってしまう。やっぱり自分はこの程度なんじゃないか。もっとできる人は他にたくさんいるんじゃないか。周りの人が先に進んでいると見える時ほど、自分だけが取り残されているように感じてしまうのです。少し前までの私は、そんな自分をなるべく見ないようにしていました。でも、見ないふりをして、なくなるわけではありませんでした。むしろ、隠そうとするほど、自分がわからなくなっていきました。

そんなある時、「自分を苦しめていたのは、弱さそのものではなく、弱い自分を認めたくない気持ちだったのかもしれない」と、気づいたのです。正直に言えば、こんなまとまりきっていない自分の姿を誰かに見せるのは、今でも嫌です。他人に、まだこんな、とっちらかっている自分を見られるのは怖いのです。でも、最近気がついたことがあります。前に進むためには、今まで自分が守ってきた殻を、自ら割っていかねばいけない時がある、ちゃんとしていなければいけない、弱さを見せてはいけない、失敗してはいけない、そんな思い込みを、少しずつ手放して素の自分を受け入れればいいのか。

それはたしかに怖いことです。でも、その殻の中にいたままでは、見えない景色もあるのです。私は、自分の中にある甘さも、弱さも、迷いも、全部なくしてしまうことが成長だとは思わなくなりました。むしろ、それらを認めたうえで、それでも進もうとすること。それが、大人になるということなのだと思うようになりました。

甘いだけでは、深みは生まれません。でも、苦いだけでも、人は前を向けません。少し苦い経験があるからこそ、優しさや喜びの甘さが際立つ。きっと人生も、それに似ているのだと思います。思い通りにならない時間、遠回りに思える時間、答えが見えない時間、そういう時間にも、意味があるのかもしれない。

私は今でも、不安はあります。自分が目指す場所に本当に届くのか、努力が報われるのか、まだわかりません。でも、ひとつだけ前より思えることがあります。それは不安がなくなったから進めるのではなく、不安があるからこそ、前に進んでいける、ということです。逆を言えば、今最大限努力できるのは、不安があるからです。未完成であることは、悪いことではない、迷っていることは、前に進んでいないことではない。むしろ、悩みながらも歩いているその時間こそが、自分を作っている重要な時間だと考えるようになったのです。

私の成長はまだ途中で。理想の自分には、まだなれていません。でも、まだ途中だからこそ、これから変われる、完成していないからこそ、可能性があるのです。だから今は、完璧な自分になろうとするのではなく、不器用でも、自分の足で一步步進んでいきたいと思っています。もし今、将来への不安や、自分へのもどかしさを感じている人がいるなら、伝えたいです。焦らなくて大丈夫。答えがすぐに見つからなくても大丈夫。私もまだ探している途中で。それでも、歩みを止めなければ、きっと見える景色がある。そう信じて、進んでいきたいと思っています。